# エリート大学生の文化的教養習得に対する歴史的考察

## ー 1980 年代の「文化熱」の分析を手がかりにー

呉　江城

## 1　はじめに

1980 年代の商品経済の解禁によって、民営企業主を代表とした旧中間層が現れた。ところが、都市新中間層が社会の注目を集めて一つの社会階層として現代中国に登場したのは 1990 年代である。学歴が低く文化資本の少ない旧中間層と比べて、都市新中間層は大学卒以上の学歴を有しており、文化資本を意識的に階層の差異化戦略に駆使してきた。なかでも、消費主義と市場経済の支えで成長してきた「小資」[1]と呼ばれた都市新中間層は消費文化をリードして、文学、映画、音楽、ファッションなどの日常生活の領域において、新中間層的文化、いわゆる「小資文化」を実践していたことが注目に値する。

しかし、「小資」の好んだ「小資文化」は、政治への無関心、消費への熱狂が示されている一方、従来の階層と文化の理論で解釈しきれない、西洋文化への崇拝、ハイカルチャーと大衆文化が混在する文化的オムニボアという特性をもったのである。

個人あるいは階層が、どのような文化的好みをもつかという問題は、文化弁別力と関わっている。文化弁別力とは、さまざまな文化活動の差異を識別し、文化的差異に価値や有効性を見出す能力である（片岡 2001：182）。また、文化の弁別力自体が、身体化した文化の知覚図式であり、ハビトゥスとして作動する文化資本の一形態である。新中間層的文化の核心にあるものを検討するには、文化弁別力の形で表れた文化資本を、1990 年代の都市新中間層がどのように獲得したのかに注目しなければならなくなる。

文化資本を身につける方法として、家庭環境からの文化資本の相続、また学校教育による文化資本の獲得、という二つのルートがある。しかし、1990 年代の都市新中間層の文化資本の獲得は歴史的原因で一時的に遮断された。1980 年代前の文化大革命などの政治的干渉によって家庭環境からの文化資本の相続が大いに妨げられている一方、学校教育、特に高等教育においては、プチブルジョア批判の的となった知識人の子女の文化資本の獲得が抑えられている（Tanigawa 2014）。家庭環境から受け継がれた文化資本は、長時間にわたらないと個人のハビトゥスとして内面化できないものであるのに対し、学校教育による文化資本の獲得は相対的に圧縮された時間で伝達できる。したがって、わずか 10 年後に誕生した 1990 年代の都市新中間層の文化資本の構成状況を考察するにあたっては、1980 年代に急激に文化と社会階層の再生産という正常な軌道に乗った高等教育から、短時間の圧縮で獲得した文化資本のほうが、家庭環

境からよりも効果的で直接だろうと考えられる。具体的に、大学生を取り巻く学校文化という環境において、彼らがどのような文化的教養[2)]と接触したかは、その後の都市新中間層の文化資本の蓄積および弁別につながるという水路づけが考えられる。そこで、本稿の問いが導き出される。つまり、1990 年代の都市新中間層の前身である 1980 年代の大学生は、再開した高等教育からどのような文化的教養を習得したかという問いである。この問いに向けて、本稿は 1980 年代の高等教育改革に注目しながら、当時の大学生の文化的教養習得の実態を明らかにすることを研究目的とする。

## 2　研究の視角

### 2. 1　先行研究

教育と文化資本の相関性に関する研究は、近年の中国の階層所属の固定化（洪・趙 2014）という話題が高まる中、きわめて大きな注目を集めている。盛んに行われているそうした研究（孫 2010、肖 2012）は主に、都市中間層の家庭環境がいかに文化資本の投資を経由し、子どもの教育効果に影響を与えるかに関するものである。ただし、こうした研究は、都市中間層の現状のみに注目し、歴史的な視点が欠けている一方、文化資本を獲得するもう一つの経路が見落とされがちである。片岡栄美（1997）によると、文化資本を獲得する主要な場は、家庭と学校であり、それぞれの場で文化の獲得様式が対称的であるという。家庭内での文化獲得様式は、相続文化資本と呼ばれ、子供の頃からの家庭の文化的環境を通じて行われる体験的習得様式である。他方、学校での文化の主要な獲得様式は、獲得資本と呼ばれ、系統的・体系的で、圧縮された時間で迅速に習得される学習様式である。今までの研究では、相続文化資本の効果のみが注目されているのに対し、学校教育で習得した獲得資本がどのような存在であるかに関しては未検討のままである。

一方、社会的制度が変動するにつれて、文化資本の獲得様式もきわめて異なる形態を取って働いている（李 2006）という指摘があるように、1980 年代の歴史的背景を考慮に入れて、高等教育の急激な変動によって加速された獲得資本の在り方の特徴に焦点を当てなければならない。本稿は、前述した先行研究の視点の不足を補い、1980 年代の中国の高等教育における変動に注目し、大学における文化的教養習得の歴史的実態を描こうとする試みである。

### 2. 2　「文化熱」と文化的教養

1980 年代に、イデオロギー統制が相対的に緩やかになって思想の解放が叫ばれるようになったという社会背景をもとに、文化大革命で弾圧された知識人をリーダーとして、知識を尊重し、多様な文化を吸収するという「文化熱」が中国社会を席巻した。1980 年代を貫いたこの「文化熱」は、哲学・美学・芸術などのハイカルチャーのみならず、ポップミュージック、大衆文学などの大衆文化にもかかわっており、文化大革命後の中国文化界の啓蒙と復興を具現した運動であるとされている。前述した高等教育改革をきっかけに、都市新中間層の予備軍としてのエリート大学生がその「文化熱」の主な参加者となった。次々と出現した「文化熱」をうけた 1980 年代の大学生はその時代ならではの文化的教養を身につけた。本稿はそうした「文化熱」に着

目し、1980 年代の大学生の文化的教養習得を課題に、歴史的な考察を行う。

研究資料は史料書、雑誌、自伝、ライフストーリー、インタビュー収録集の多様な媒体を扱った。研究方法として、以下の段取りで「文化熱」における 1980 年代の大学生の文化的教養の育成に対する歴史的分析をする。まず、『激情三十年· 中国百姓生活大変遷』という史料書から、大学生に関する新聞記事を抽出し、1980 年代の大学生の「文化熱」に関連するものを用いて時系列的な変化を整理する。その歴史的変化から、「文化熱」を、「読書文化」、「娯楽文化」、[3] という二つのカテゴリーにわけて分析枠組みを作る。続いて、大学生を含む若者を対象に社会調査を行っている学術誌の『青年研究』の中から、大学生の文化熱に関連のある記事を抽出し研究資料として取り扱う。さらに、復旦大学出身者である李若虹の自伝「八十年代在復旦的大学生活」、『刻在霊魂深処:80 年代之北大記憶』に収録された北京大学出身者のライフストーリー[4]、また新週刊が編集する『我的故郷在八十年代』という史料書・インタビュー収録集などの質的資料に対する整理を経て、大学生の文化的教養の習得状況を描き出す。

## 3　高等教育とエリート大学生の形成

### 3. 1　文化的再生産の遮断と再開

1966 年から 1976 年までの「文化大革命」は中国の高等教育の発展を二つの時期にわける。1960 年代までの間の高等教育は文化的再生産の場として階層の再生産を補強した。政治幹部、都市知識人の家庭の子女の間においては、知識偏重を特徴とした高等教育を経て、社会のエリートになるという経路が確立された。一つの例として、文化大革命開始直前の北京大学と清華大学において、政府・共産党の高級官僚、知識人などの子女が学生数の三分の二にも達していたという（小林 1975）。

この情勢を徹底的に変えようとした毛沢東などの指導者は、1966 年から 1968 年の間に、大学入試を撤廃しようとしたが、人材育成の混乱を受けてやむをえず 1969 年から大学入試を再開した。しかしその再開は 1949 年から 1966 年の旧体制の再開を意味するわけではない。1969 年から 1976 年の間の「大衆による推薦」という新しい大学入試体制が創出された結果、知識重視よりも共産党政権への忠実さが優位性を示すことになった。そうした教育体制のもとで、知識人的文化の正統性が失われており、階層分断に寄与する文化的再生産の機能が一時的に遮断された。高等教育における文化的再生産をふたたび起動させはじめたのは 1977 年から再開した「全国普通高等学校招生入学考試」である。ただし、家庭から相続した文化資本に依拠する文化的再生産の再起動は漸次的な段階でしか達成できないことに注意を払う必要がある。1940 年から 2001 年のデータを使い、中国の家庭背景が世代間の教育不平等に及ぼした影響を分析した李春玲（2003）によると、1980 年代に教育を受けていた世代の教育獲得は家庭による影響が増えつつも、1990 年代後期に至ってようやく 1960 年代初期の水準に回復したということがわかった。こうして、上の世代から文化資本の相続量が相対的に少ない 1980 年代の大学生は、急激に再開した高等教育から獲得した文化資本がメインだろうと判断できる。しかも、1980 年代の高等教育改革はカリキュラムの改革を通じて、大学生の文化的教養の習得に条件づけた。次節ではその内実を見てみよう。

### 3. 2　文化的教養の習得を条件づける高等教育改革

1980 年代に入り、教育改革は、改革開放の潮流に乗って拍車をかけた。そのうち、高等教育における多様な改革策が注目を集めていた。とりわけ、1985 年、『中共中央関于教育体制改革的決定』で決まった方針が高等教育の改革を助長させた。その改革は、専門大学の撤廃と総合大学の創立、単位制の導入、選択科目の設立、学校への自主的管理権の付与などに表れている（Pepper　1990：136−139）。次に、本稿が注目する学生の文化的教養に関するカリキュラムの改革に絞って考察する。

改革前には、国家建設に必要な人材育成を目的とした専門家養成が中国の高等教育の中核であった。そのため、カリキュラムの設置において、専門性、政治性が強調された一方、教養教育、特に人文教育の不足が問題として取り上げられた。楊嵐（2006）によると、そのようなカリキュラムのもとで、学生全体数の約 90%も占めた理科系学生は、外国語、政治科に限られた共通科目以外の人文教育に触れることが制度的に不可能であったという。人文教育の貧弱は、学生の社会、倫理、環境問題、歴史文化などの諸分野についての知識の欠如をもたらし、文化的教養の獲得を抑制したと考えられるだろう。1980 年代を皮切りに始まった高等教育のカリキュラムの改革は人文教育の貧弱の解決に向かった。数多くの人文社会学科の復帰および発展とともに、文系、理系相互選択科目が大学生のカリキュラムに導入され、学科間の知識の統合や学生の知識の幅を広げるという教養的な要素が含まれている（楊 2006）。一例として、理工大学であった華中理工大学は 1986 年に、理系生のカリキュラム概要にはじめて「文化的素養」の育成という目標を掲げた。文化的素養には、「言語文字の把握、文学芸術の理解、マナーの習得」という内容が強調されている（別・楊編　2008:159）。また、大学生の文化的教養を習得するルーツとして、サークルの参加もカリキュラムの設計に入っている。一例として、武漢大学においては、決まったカリキュラムを受ける「第一教室」および課外の学術サークルに参加する「第二教室」といった理念が提出された。その結果、1980 年代に、「浪陶石」、「桜詩社」、「思想家」、「読書クラブ」など、400 以上の学生クラブが武漢大学に現れた（別・楊編 2008:160）。こうしたカリキュラムにおける改革策は、大学生が文化的活動と頻繁に接触し、文化的教養を習得する条件となった。

### 3.3　都市中間層へと転生

前述した高等教育の改革はさらに「知識人重視」という国のイデオロギーの転換、就職面の優遇措置などと相まって、エリートとしての大学生の社会地位を確保した。そのエリートの地位性はまず当時の大学生の割合に表れている。マーチン・トロウは高等教育の入学率をもとに、高等教育の大衆化をエリート型（15%以下）、マス型（15%-50%）、ユニバーサル・アクセス型（50%以上）という三つの段階にわけている。1980 年代に、中国の大学入学率は 1-3%程度 [5)]であり、大学生を社会のエリートに位置付けることができる。また、「知識を尊重し、人材を尊重する」という政府の呼びかけが社会中に広まる中で、大学生は「天之骄子（時代の寵児）」と呼ばれ、高い社会的地位を有することになった。さらに、国の支援政策として、大学生は毎月の生活費の援助がもらえるだけではなく、卒業後、国営企業あるいは政府機関から仕事を割り当ててくれるという「包分配」制度にも恵まれる。

さらに、高等教育から文化的教養を習得した 1980 年代のエリート大学生は、市場経済の確立を経て、1990 年代の文化消費志向の強かった中国の都市中間層へと転生した。1990 年代から、外資系企業が中国に多く設立されたとともに、前述した「包分配」制度が徐々に崩壊し、卒業後自由な選択によって外資系企業に就職する大学生の人数が増えた。一方、国営企業などに就職していた従業員の間に、起業する、あるいは外資系企業や、民間企業に転職するという風潮も流行していた。そのような風潮を引き起こした主体はまさに 1980 年代の大学生卒業生である。表 1 が示しているように、本稿の研究資料の一部にあたる 1980 年代の北京大学卒業生のライフストーリーからもその転職経歴が多く見られる [6]。また、1990 年代の都市新中間層の構成に関する社会調査データからも、1980 年代の大学生と 1990 年代の都市新中間層の強い関連性が裏付けられる。社会学者の李強によると、都市中間層の実体をなしたのは、25 歳から 35 歳で外資系企業に就職し、高い学歴と強い消費意識を有している人々であったことがわかる（李 1999）。こうして、エリート大学生と都市新中間層のつながりが確認できる。次の章では、2 章で述べた本稿の手がかりである「文化熱」を踏まえ、エリート大学生の読書文化、娯楽文化における文化的教養の習得状況を検討する。

**表 1　『刻在靈魂深処：80 年代之北大記憶』に収録された北京大学出身者の経歴**

| 名前 | 入学年 | 大学卒業後の進路 | 2018 年現在の職業 |
|---|---|---|---|
| 車耳 | 1977 | 国営企業に就職 | 外資系企業の取締役 |
| 劉楠祺 | 1977 | 政府機関に就職 | 国営企業の管理層 |
| 呉剛 | 1978 | 国営研究所に就職・留学 | 多国籍企業の取締役 |
| 劉雪楓 | 1979 | 共産党機関に就職 | 国営企業の管理層 |
| 于慈江 | 1980 | 国営研究所に就職 | 翻訳家、詩人、文学評論家 |
| 趙斌 | 1982 | 大学の教職に就く | 民営企業の社員 |
| 鄒冬平 | 1983 | 国営企業に就職 | 民営企業の管理職 |
| 賴小晶 | 1983 | 政府機関に就職 | 民営企業の社員 |
| 王月泓 | 1983 | アメリカにいく | 多国籍企業の管理層 |
| 孔書玉 | 1984 | 大学院に進学・留学 | 海外の大学教授 |
| 柯映紅 | 1984 | 大学院に進学・留学 | 海外で起業 |
| 楊瑞芳 | 1984 | 政府機関に就職 | 民営企業の取締役 |
| 西渡 | 1985 | 出版社に就職 | 出版社の編集者 |
| 秦紅 | 1986 | 民営企業に就職 | 民営企業の社長 |

## 4　「文化熱」からみるエリート大学生の文化的教養の習得

### 4.1 読書文化

1980 年代初期の中国の大学キャンパスにおいては、サルトルの実存主義、ヒューマニズム、フロイトの精神分析など、西洋的学説書が多大な人気を博していた（趙 1982）。こうした思想

および学説の受容層は文系の大学生、政治的関心の高いあるいは文学の好きな若者に集中している。受容の仕方として、学説に関連する理論書、入門書を読んだり、文学作品、現代劇、映画を鑑賞したりするものがあった。しかし、受容にかんしては、学説の内容自体が大学生を惹起したためというよりも、文学的なものとして哲学の文学性を消費することが大学生のニーズに合ったということが当時の読書習慣調査（楊 1983）からわかった。その読書習慣調査には、上述の三つの学説を聞いたことのある大学生は全体の30%を占めており、三つの学説をもとにした文学作品を読んだことのある大学生は40%にも達しているが、三つの学説を熟読し研究したことのある大学生はわずか3%しかいなかった、という結果が現れた（楊 1983）。同時に、当時の西洋かぶれの風潮に同調するということで、西洋的学説ならなんであろうと受け入れるという原因も重要であった。復旦大学卒業生の李若虹（2014）の自伝 [7]には、当時の大学生の心性が語られている。

> ある午後、ハイデガーの『存在と時間』の中国語翻訳書が出版され、学生食堂の本屋で出されたとたん、私を含むクラスメート全員が殺到した。重々しいその本をとってざっと読んでみると、やっぱりわからないと思いながらも、躊躇せずに買ってしまった。我々哲学専攻の学生は、皆、西洋の名著に目がないのよ（傍点筆者注）。

サルトル、フロイトの学説の受容ブームが少し下がった1980年代の半ば以降に、主意主義を主張する哲学者ニーチェの著書は大学生の愛読書となり、凄まじい人気を誇った。北京大学、清華大学、中国人民大学、北京師範大学の大学生を対象にした調査によると、ニーチェの読者は学部生に集中していることが明らかになった。また、北京大学の1986年入学の学生のうち、60%の学生がニーチェの著書を持っており、85%の学生はニーチェの著書を読んだことがあるという調査結果があった(李 1988)。こうした結果からも当時のニーチェの人気がうかがえる。しかし、サルトル、フロイト学説の受容と同様に、哲学専攻あるいは一部のニーチェを研究した大学院生を除いて、ニーチェの思想そのものよりも、その著書に使われて詩化される言語表現のほうが学科の境界線を越えて当時の大学生の心を掴んだ(李 1988)。このような読書習慣は当時の大学生の文化的教養習得の特徴を反映している。哲学の本質を把握するには、家庭教育によって培った高い読解力と思考力が必要となるので、哲学は大衆にアクセスしにくいハイカルチャーとみなせる。しかし、哲学の本質的な理解ではなく、ただその文学性を消費する行為の普及によって、哲学は大衆にアクセスしやすいものとなり、そのハイカルチャー的な性質は薄められた。

哲学ブームと平行線をたどったのは美学と詩の流行りであった。美学は、個人的主観性の追求を肯定し、当時の大学生が集団主義の圧力からの自由を求めるという精神的需要を満たした。大学生の「精神的指導者」と呼ばれた美学者の李沢厚の高い人気は以下の李若虹（2014）の自伝における記述からも裏付けられる。

> 1980年代の文化思想界において名高い李沢厚は、大学生に大きな影響を与えた文人だ。彼の著作『美的歴程』、『中国古代思想史論』といえば、手に入れていない文系の大学生は

たぶん一人もいないだろう。1985 年に、彼が復旦大学を訪問し、人込みの第一教室で講演した時、学生から絶大な人気をもらった。

ブームをリードした李沢厚は、代表的な本である『美的歴程』の中で、古代中国の美的伝統を新しい視点で再解釈していた。この作品は、大学生の美学への関心を高めただけではなく、中国の伝統文化を再考させたことにもつながる。このように、哲学ブームにおける西洋文化への心酔と美学ブームにおける中国の伝統文化への再思考が融合し、1980 年代の大学生のロマン主義的気質を醸成させた。

ロマン主義に対する執着は美学の領域にとどまらず、文学ジャンルのヒエラルキーの頂上に立つ詩（新週刊編 2014：169-170）にも蔓延する。当時の大学生は詩を読んだり書いたりすることで、独特な美意識を習得した。さらに、詩に対する個人的な感覚も詩のクラブの結成、詩の雑誌の出版を通して集団化していった。1980 年代には、北京大学の「未名湖」、復旦の「詩耕地」、北京師範大学の「ゆりかご」、華東師範大学の「夏雨」、吉林大学の「赤心」、山東大学の「雲帆」、武漢大学の「浪淘石」、などの詩のクラブが多く現れた（荘 2011）。異なるスタイルを有している詩のクラブは、学校ごとに異なる詩の流派を誇る詩人を再生産した。例えば、北京大学 1985 年入学の卒業生である詩人西渡のライフストーリー（阿憶編 b 2018:577-584）によると、1980 年代の北京大学の中文学科に、詩を書く伝統が根を下ろし、駱一禾、海子、繆哲、臧棣、郁文などの北京大学ならではの詩人が次々と輩出した。

他方、1980 年代の詩壇には、きわめて多くの詩の流派があり、西洋の詩の書き方を模倣する傾向にも注意を払うべきである。その時の最大の詩雑誌であった『詩刊』の編集者に対するインタビューでは、80 年代の中国の詩は、5 年、10 年ぐらいの短時間で、200 年間で蓄積してきた欧米の印象派、象徴主義、フロイトなどを一気に取り入れた（新週刊編 2014：169-170）というように、中国の詩も西洋文化をモデルにしたことがうかがえる。多々ある流派の中で、大学生にもっとも大きな影響を及ぼしたのは「朦朧詩」というものである。この名付けからもわかるように、「朦朧詩」の一つの特徴はその曖昧さにある。「朦朧」という感覚は言葉を曖昧化させたり繰り返したりすることで達成できるものであるため、読者は「朦朧詩」から読み取れるのが、主題なしの不明確性といえよう。そうした特徴をもった「朦朧詩」を読む大学生がそこから摂取したのが、ポストモダンの議論でよく見られる「大きな物語の消失」とさらに推測できよう。

「朦朧詩」のもう一つの特徴はその反主流、反伝統の意味合いにある。1986 年以前に、民間の詩人によって書かれた「朦朧詩」は、サブカルチャーとして詩壇の正統派に受け入れられにくい局面に陥っていた。そのため、若者の「朦朧詩」詩人が自費で詩集を出版し、民間における詩の朗読会、芸術祭りを開催するなどで、正統派の詩人との闘争を続けていた。主流文化との闘いで築いた「朦朧詩」はそのため、主流文化および正統文化と距離を取りたい当時の大学生の間に、人気を博した（楊 1989)のである。

哲学、美学、詩など、ハイカルチャーと思われた読書文化が大学の内部から発祥した一方、社会全体に受け入れた大衆的な読書文化も大学に入り込んできた。それは、大学生の文化的教養の形成にもう一つの側面を持たせる。一つの例として、台湾、香港からの大衆文学があげら

れる。若者の恋物語を描く瓊瑤の青春小説、人生の放浪を主題にする三毛のエッセー、中国伝統の義俠精神が織り込まれる金庸の侠客小説は大学において、社会全体の好みと共振しながら、一時的にブームを形成させた（阿憶編 a,2018: 520）。

### 4.2 娯楽文化

1980 年代の大学生の間に形成した娯楽文化は、ダンス、音楽、映画への情熱的鑑賞と実践に表れている。ダンスブームの隆興には、伝統の復興という歴史的な原因もあれば、西洋文化から受けた影響もある。このダンスブームは文化大革命前の集団的フォークダンスに起源をもつ。1949 年以降、集団的フォークダンスは社会主義国家が政治的規律訓練の手段となった。それは、5 か年計画目標の達成を祝い、共産党政権と社会各界を団結するプロパガンダとして、集団的フォークダンスが中国人にとっての日常的な存在であった（許 1983）。しかし、1959 年以降、「階級闘争」が白熱化して国家の方針となるにつれて、集団的フォークダンスはブルジョアのライフスタイルと見なされ、中国社会の公的空間から消えた（許 1983）。1978 年から改革開放政策による国家路線の転換を契機に、大規模な政治的集団ダンスが再び登場したとともに、個人が開催した社交ダンスも上海を皮切りに、中国の各地の大学に浸透していった（張 1985）。社交ダンスは旧ソ連から受け継いだものなので、旧ソ連の歌を流したことが多かった。また、この社交ダンスのブームは男女交際の目的性を強くみせた。集団的ダンスの社交性を一変させたのは、1980 年代のディスコブームである（張 1985）。アメリカから台湾、香港を経て中国本土に伝来してきたディスコは、大学において人気を呼ぶだけではなく、学校文化のヒエラルキーの上位にあった。ディスコの音楽にあわせて、柄付きのシャツ、サングラス、パンタロンなどの個性的服装を着用した大学生の姿は 1980 年代の大学の風景となった。北京大学の大学生である趙斌のライフストーリー（阿憶編 b 2018：594−595）では、ディスコに関するあるエピソードが描かれた。このエピソードからも、当時の大学におけるディスコの流行りと学校文化における高い地位が確認できる。

> （そのとき）何人かの学生は北京大学に人気歌手である成方園さんを招き、コンサートをする企画をした。人気歌手をどうしても聞きたいと盛り上がった学生諸君はお金を出して、かろうじて入場券を手に入れた。しかし、ようやく成方園さんの出番がきたところ、登場したのは彼女の彼氏を自称した一人の男だった。成さんは急用でこられなくなったとのことだった。馬鹿にされた観客たちはものすごく怒りを買った。すると、分からないところからディスコの音楽が流されて、その男はパッと踊りだした。騒がしかった会場は一瞬で静まり返った。観客はそのダンサーの踊りに感動されちゃって、先の不満をスッキリ忘れた。さすがディスコだなと私は思った（傍点筆者注）。

一方、大学生の音楽と映画の鑑賞においては、ダンスの受容と異なる在り方を呈示する。大衆文化とハイカルチャーの混合的受容が特徴的である。テレサ・テンを代表とする香港と台湾の歌が大学キャンパスで莫大な人気を博したと同時に、もともと音楽的教養のなかった大学生が入学してクラシック音楽に初めて触れたケースがよく見られる（阿憶編 ab 2018：149−154、

120-130、599-602）。クラシック音楽にアクセスできた経路の一つは、学校の合唱団あるいは芸術団への参加である。しかし、合唱団と芸術団は、設立当初には学生によって自発的に組織された。学生が自発的に設立した組織は、専門的あるいは体系的な教育指導が行われていなかったため、クラシック音楽を代表とした西洋的ハイカルチャーに対する理解は表面的にとどまることになる。北京大学出身の柯映紅はライフストーリーの中で、ハイカルチャーとの接触に関して色濃く書き込んだ。彼女は北京大学に入った後、「To Alice」というピアノ曲を初めて耳にしたことをきっかけに、合唱団に入団した。北京や上海の学生と比べて音楽的教養が乏しい彼女は、「授業を受けたり本を読んだりすることで、西洋のクラシック音楽の知識を一生懸命勉強したが、今は表面的な理解だけが残ってしまっている（阿憶編 b　2018：600）」という記述があった。ここで、自己学習が、学生にとってハイカルチャーと接触する重要な方法であったといえる。家庭からの文化資本相続が短期間でいまだに達成できなかった 1980 年代において、学校文化を受けて自己学習的な文化的教養習得は広く実践されていたではないかと考えられる。

また、前述の合唱団や芸術団の参加に加えて、大学生がハイカルチャーと接触するもう一つの経路は、学校が主催する映画放送会、コンサートへの参加にある。しかし、このようなイベントはごく少数の人にしか開放されていなかった。孔書玉（阿憶編 a 2018：215−219）のライフストーリーによると、1980 年代に、すべての外国映画は大衆に開放された商品ではなかったという。そのかわりに、映画館で公開される外国映画は限定された、娯楽性の強いものだけであった。一方、エリートとしての大学生は映画館で放送される大衆向けの映画のみならず、映画放送会に参加し、最新かつ文芸的西洋映画にアクセスするチャンスもあった。その差異のもう一つの例は、映画祭に参加できるかどうかに表れている。当時の中国では映画祭があったが、映画祭に参加できたのは、大学生を含む社会的エリートだけであった（阿憶編 a　2018：217）。こうして、映画文化は、大衆と大学生エリートの間に、文化的序列を形成したわけである。

1980 年代の大学生が享受した娯楽文化の最後の側面は、ギターとロック音楽に対する熱狂に反映されている。前述のダンスのように、ギターは規律訓練の手段になった時期もある。文化大革命の間、ギターはブルジョア楽器と見なされてさんざん批判された（Baroque 2006）。ギター演奏者もブルジョアとしてバッシングを受けた。その後の 1980 年代には、改革開放とともに、ギター演奏が中国社会に再び現れ、さらに大学のキャンパスでブームを巻き起こした（Baroque　2006）。ギターを学ぶ理由に関して、文化的教養の育成は無視できない理由である。趙斌（阿憶編 b　2018：592）のライフストーリーの中で、彼はギターを学ぶ由緒を説明した。

> 我々のような文芸的素養が生まれつきない者は、積極的に芸術的気質や文学的気質を身につけさせなければならない。これはいわゆる文芸青年への進化だ。じゃあ、何を勉強しようかとすると、ハーモニカやフルートなどの小さな楽器が人目を引かないし、バイオリンやピアノは上品すぎるし、やっぱりギターは、多くの学生にとって唯一の選択肢だった（傍点筆者注）。

ここで、大学生の文化的教養育成の道具としてのギターの妥協が見られる。つまり、大学文化のギターブームには、ハイカルチャーと大衆文化の間にある中間的文化の意識の萌芽がギタ

ーの選択に凝縮するという側面がある。くわえて、ギター文化の内的序列も存在する。ロックミュージックやキャンパスソングの伴奏に使う一般のギター以外に、上品とされるクラシックギターも大学に流行している。譜表を読む必要があるためだけではなく、演奏される音楽が「愛のローマ史」のような西洋曲なので、クラシックギターが上品さを有することになった。

ギターの流行りを伴ったロックミュージックのブームは、1980 年代の大学キャンパスを席巻した。欧米から発祥してサブカルチャー的なロックミュージックが香港と台湾において現地化の加工を通じて中国本土に紹介され、中国の大学キャンパスで、ブームを巻き起こしながら、多くのロッカーを育成した。そうした文化流通を土台にした経路の中で、ロックミュージックがサブカルチャーの色合いを薄め、独特な存在となった。サブカルチャーと主流文化の対抗性が緩和されるのである。中国の最初のロッカーとして知られる歌手崔建は、1987 年に北京大学で個人コンサートを開催した際、共産党機関紙の『人民日報』はそれに対して高く評価した（新週刊編 2014:230-236）。その原因は、歴史的な背景とかかわっている。ギターやダンスとは異なり、ロックミュージックは 1980 年代以降の中国社会に新しく伝来したものであり、政治的闘争から受け継いだ歴史的重荷がない。したがって、政治的批判あるいは規律訓練の道具としての経験のないロックミュージックは、欧米での反主流・反伝統のサブカルチャーのラベリングを弱めて、1980 年代の中国社会のロマンチックで自由な精神気質を吸い込み、エリート大学生の学校文化の一つのシンボルになったわけである。そのようなローカリゼーションは、主流に受け入れられることがない、西洋の対抗的なロック音楽文化の性格を覆した。

## 5　おわりに

以上のように、高等教育改革の背景を踏まえながら 1980 年代のエリート大学生の文化的教養習得に関して、歴史的考察をしてきた。まとめてみると、その習得状況から以下のような特徴が明らかになった。

まず、1990 年代の都市新中間層の前身として、エリート大学生は哲学、クラシック音楽、西洋文芸映画などのハイカルチャーとの接触を通して、大学生内部文化の差異化、大衆とのディスタンクシオンなどで中間層文化の萌芽が見られた。しかし、ハイカルチャーに対する習得は表面的なものが多かったので、蓄積した文化弁別力がそれほど確固としたものではなかった。また、ハイカルチャーにとどまらず、大衆文化との共振、主流文化との柔軟的対抗というような文化的寛容性も、読書文化、朦朧詩、ロックミュージックの変容などに表れた。さらに、西洋文化への崇拝という風潮をもとに、ディスコ、ギターなどの文化製品を西洋の社会的文脈から脱文脈化させ、中国の時空間に適合するあらたな文化的序列を形成する。

このような特徴は、高等教育改革に関わっているといえる一方、「1 はじめに」で言及した都市中間層の文化に表れた特性とも関連づけられる。文化大革命などの政策的干渉がなければ、文化資本をもとに階層の文化的再生産が異なる世代の間に続けられたはずだ。しかし、本稿の対象となる 1980 年代の大学生は特殊な歴史条件におり、家族から相続した文化資本が相対的に抑えられたので、急激に再開した高等教育から習得した文化的教養が彼らにとってメインな文化資本のもととなった。このような特殊なルートで習得した文化的教養は、特殊な時代性を

帯びている。流行文化にひきかえ、ハイカルチャーの習得は、家庭環境の薫染が必要であり、長い時間を経て人に内面化させる過程が不可欠である。そのため、高等教育の改革によって、1980 年代の大学生にハイカルチャーと接触するチャンスが与えられても、その理解が表面的でしか受け取りえなかったのである。獲得文化資本は長時間の内面化を必要としないわりに、ハイカルチャーと大衆文化の境界線を維持する文化弁別力の育成を怠る傾向がある [8]。一方、西洋かぶれの風潮が文化的教養習得に浸透した解釈として、日本社会に根を下ろした文化資本の特質を捉えるキャッチアップ文化資本という概念を取り上げたい。キャッチアップ文化資本は、西洋社会の先進的な文化事象を取り入れ、家庭の階層文化よりもむしろ学校文化に根ざしているということが特徴とされている（大前 2002）。1980 年代の中国社会は改革開放の政策の中で、西洋、日本などの先進国がモデルとなった。西洋の文化はモダンで先進的だという認識が社会エリートの大学生に広がっていた。これは前章のライフストーリーの分析でも検証できた。このような「学校的」なキャッチアップ文化資本は、職業および社会階級に根ざした文化資本以上にいっそう脆い文化資本（大前 2002）として、1990 年代の都市中間層の文化資本に見られる大衆文化とハイカルチャーとの混在につながりがあろう。

本稿は 1980 年代の高等教育改革を背景に、大学生の文化的教養習得に注目している。これは、1990 年代の都市新中間層の文化資本獲得の前史として位置づけられる。しかし、1990 年代に入ると、消費主義が台頭し、冷戦体制の終焉を迎え、グローバリゼーションが加速化したという新たな社会背景の中で、中国の都市新中間層は、外国文化と消費文化を文化資本の資源として取り入れようとする実践を行った。こうした新たな動きを念頭に、今後は本稿の延長線にある 1990 年代の文化的グローバリゼーションと消費文化の勃興に焦点を移して、都市新中間層の文化的オムニボアという特質に対する歴史的考察を深めていく。

## ［注］

1) 語源的に「小資産階級」の略語としての「小資」は改革開放政策が実施された以降の 1990 年代に立ち現れ、会社のホワイトカラー、都市の中の独身貴族、自由業者、記者、編集者、知名度の低い芸術家、大学教員など、現代中国の早期の都市新中間層を指した。一方、「小資文化」とは 21 世紀の初期に誕生し、メディアの「小資」イメージの構築で始まり、「小資文学」、「小資映画」、「小資カフェ」、「小資ウェブ」などの文化的消費に基づいた都市新中間層的趣味を象徴する文化である。

2) 本稿の分析軸となるのは、ピエール・ブルデューの文化資本だが、具体的に 1980 年代の大学生を対象にする場合、文化資本のかわりに、都市中間層の文化資本の元にあたる文化的教養という概念を用いる。本稿では、文化的教養を大学生が学校における文芸活動の参加を経て習得した文化的内容・知識・振る舞い方などと定義づける。文化資本をそのまま使わない理由は、以下の 2 点による。まず、従来の研究では、文化資本を量的に測定する指標として、書籍、ピアノの所有量、博物館、美術館への訪問頻度、学歴などが用いられたが、これらの指標の設定は家庭環境から相続した文化資本を前提とすることが多い。また、文化資本は量と構成によって階層の分断に寄与すると思われ、階

層化社会の分析に常に使われている。階層化がまだ形成していなかった 1980 年代の中国社会（李 2011:295-297）を対象にした本稿はそこで文化資本という概念を避ける。

3) 新聞の記載から、当時の大学生の文化活動を細分したうえで、哲学、美学、詩の鑑賞、知識や美意識の向上に関する文化を読書文化とよぶ。また、ダンス、映画、音楽の鑑賞など、身体を媒体とするふるまいに関するあるいはリラックス効果のある文化を娯楽文化とよぶ。読書文化は伝統的な知識人のイメージに近い一方、娯楽文化は若者文化の側面を表している。このようなカテゴリーによって、大学生の文化的教養の習得を異なる側面から分析可能と考えられる。

4) そのライフストーリーは数多くあるが、本稿は大学の文化生活に関するものだけを抽出した。また、ライフストーリーを語った人の経歴をまとめて、表 1 を作った。

5) https://data.worldbank.org/indicator/SE.TER.ENRR?end=2017&locations=CN&start=1970&view=chart（世界銀行の中国大学入学率に関する統計　2019 年 8 月 28 日取得）。

6) 語り手の転職後の社会的な立ち位置と言説のカテゴリーの関係について述べると、学術系やビジネス系を問わず、そのライフストーリーには読書文化や娯楽文化に関する記述が混在しているという特徴が見られる。このような語り方は、エリート大学生の集団としての凝集性を反映している。

7) 原文は中国語である。この引用および他のほかの引用は筆者が翻訳したものである。

8) この議論の延長線上に、日本、韓国、中国などの後発近代化国家によく見られる「圧縮された近代化（Chang 2010）」という議論がある。紙幅の都合上、本稿では詳しくのべないが、呉（2019）において論じている。

## ［文献］


阿憶編 a,2018,『刻在霊魂深処:80 年代之北大記憶(上)』北京大学出版社.

阿憶編 b,2018,『刻在霊魂深処:80 年代之北大記憶(下)』北京大学出版社.

Baroque,2006,「我的吉他小趣史」香港中文大学民間歴史データベース http://mjlsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=4&tid=2617　2019 年 8 月 28 日取得.

Chang Kyung-sup,2010, “The Second Modern Condition? Compressed Modernity as Internalized Reflexive Cosmopolitization” *British Journal of Sociology*, 61 (3):444-464.

別敦栄・楊徳広編,2008,『中国高等教育改革与発展 30 年（1978-2008）』上海教育出版社.

呉江城,2019,「“圧縮混合現代性”視角下的小資文化」『2019 年中国社会学会大会・文化社会学論文集』:234-243.

复旦大学党委宣伝部,1982,「西方哲学思潮対大学生的影响」『青年研究』(07):10-12+19.

片岡栄美,1997,「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』9(9): 23-38,136.

片岡栄美,2001,「現代文化と社会階層」東京都立大学博士論文.

何明升・江衛民・姜明・呂明華,1984,「工科大学生自由活動的社会学研究」『青年研究』(08):31-39.

奚潔人,1984,「大学生的審美趣味」『青年研究』(08):53-60.

小林文男,1975,「中国の教育改革と入試体制:文化大革命下の高等教育の現状」『教育学研究』42(4): 292-297.

洪岩璧・趙延東,2014,「从資本到慣習:中国城市家庭教育模式的階層分化」『社会学研究』29(04):73-93+243.
黄振平,1989,「当代青年的文化熱点」『青年研究』 (09):13-15+22.
許妙廷,1983,「青年与自娯性舞蹈」『青年研究』(11):43-48+42.
毛恩・龚海峰,1987「不可忽視的一代:上海市 12 所高校千名学生思想調査総合分析報告」『青年研究』(11):1-9.
翁大偉,1985,「城市青年生活方式的趨向性」『青年研究』(11):12-16.
大前敦巳,2002,「キャッチアップ文化資本による再生産戦略:日本型学歴社会における「文化的再生産」論の展開可能性」『教育社会学研究』70(0):165-184.
北京大学団委調査組,1982,「如何看待国外思想文化在大学生中的影响」『青年研究』(07):13-19.
Pepper, S, 1990, *China's education reform in the 1980s: Policies, issues, and historical perspectives (No. 36)*. University of California Inst of East.
李煜,2006,「制度変遷与教育不平等的産生机制:中国城市子女的教育獲得(1966—2003)」『中国社会科学』(04):97-109+207.
李劲民,1988,「大学生中的“尼采熱”及其解析」『青年研究』(12):30-35+5.
李若虹,2014,「八十年代在復旦的大学生活」香港中文大学民間歴史データベース http://mjlsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=4&tid=2617　2019 年 8 月 28 日取得.
李強,1999,「市場転型与中国中間階層的代際更替」『戦力与管理』(03):35-44.
——,2011,『社会分層十講』社会科学文献出版社.
李春玲,2003,「社会政治変遷与教育机会不平等:家庭背景及制度因素対教育獲得的影響(1940—2001)」『中国社会科学』(03):86-98+207.
新週刊編,2014,『我的故郷在八十年代』中信出版社.
孫遠太,2010,「家庭背景、文化資本与教育獲得:上海城鎮居民調査」『青年研究』(02):35-43+95.
肖日葵,2016,「家庭背景、文化資本与教育獲得」『教育学術月刊』(02):12-20+41.
Tanigawa Shinichi, 2014,「The Chinese Cultural Revolution and Educational Stratification: Revolution in Education Revisited」『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』(42): 57-87.
張洪海,1985,「北京青年的“跳舞熱”」『青年研究』(03):45-48.
趙培文,1982,「他们為什么対西方学話興趣濃厚——存在主義、人文主義、精神分析法与高層次青年読書特点」『青年研究』(04):8-15.
朱培蓮,1988,「大学生的“尼采熱”」『青年研究』(02):47.
荘偉傑,2011,「重返 80 年代:校园詩歌的写作熱潮与文化影響」『海南師範大学学報』24(04):71-75.
楊宜音,1983,「从読書構造看大学生的思想構造」『青年研究』(03):33-39.
楊嵐, 2006,「中国の高等教育改革における教養教育の変容:市場化への対応に焦点を当てて」『教育学論集』(02): 123-143.
楊長征,1989,「迷途:当代青年詩歌運動」『中国青年研究』(02):22-23.

（教育文化学コース　博士後期課程 1 回生）

（受稿 2019 年 8 月 30 日、改稿 2019 年 11 月 11 日、受理 2019 年 12 月 13 日）

# エリート大学生の文化的教養習得に対する歴史的考察

## ―1980 年代の「文化熱」の分析を手がかりに―

呉　江城

本稿の問題意識は、1990 年代の中国の都市新中間層の文化に表れた特性にある。その特性は、特殊な歴史条件にあった学校教育から短時間で獲得した文化資本の在り方と深くかかわっている。しかし、これまでの研究では、そのような視角が等閑視されてきた。先行研究に対する批判を踏まえて、本稿は 1980 年代に流行った「文化熱」をてがかりに、急速な高等教育改革によって形成したエリート大学生の文化的教養習得に焦点をあて、その実態を明らかにすることを研究目的とする。多様な歴史資料を取り扱った本稿は、エリート大学生の文化的教養の習得状況およびその特徴を「読書文化」、「娯楽文化」の枠で精緻に描き出してまとめた。今後は 1990 年代の新たな社会動向に注目し、中国の都市新中間層の文化の特性の解明に向けて続いて歴史的考察を行う。

# Historical Research on the Cultural Accomplishments of Elite College Students: Based on an Analysis toward “Cultural Boom” in the 1980s

WU　Jiangcheng

This research starts with a series of cultural features shown by the emerging middle class during the 1990s in Chinese cities. These features were closely associated with the culture capital attained within a short time and during a specific historical period through education. However, this perspective was neglected in previous studies. Therefore, this study focuses on cultural accomplishment of college elites accompanied by rapid higher education reform and discusses how they attained the level. Multiple historical records were utilized in the study. As a result, within a framework of “reading culture” and “entertainment culture,” how the college elites obtained the cultural accomplishments was elaborated, and the features exhibited in the process were summarized. Future research will place emphasis on new societal trends in the 1990s and continue historical analysis on the features of the new middle class culture in China.

**キーワード**：　エリート大学生、文化的教養、文化資本

**Keywords**: Elite college students, Cultural accomplishments, Cultural capital